令和5年度　第57回　中学生の「税についての作文」

『命のバトン』

町田市立南中学校　3学年　鈴木　万央

私の祖母は今年二月四日に倒れた。診断は小脳出血だった。

入院すると母は、すぐに役所で「限度額適用認定証」の申請をするように病院から言われた。翌月、母から数十枚もの明細書の束を見せてもらったが、明細書の枚数や点数の割に実際の請求額が少なかった事に驚いた。この差額は一体どこから補われるのだろうか。

ふと、母と一緒に歯科に行くと同じような治療であっても母と私では病院での診察料に大きな差があった事を思い出した。私の場合「小児医療証」によって二百円で済むが、母は数千円の支払いをしていた。なぜ、私にはこのような補助があるのか。不思議に感じて調べてみると、医療を安心して受けられるように税金で一部が補われている事を知った。

そして、医療費だけではなく、秋に退院予定の祖母の為、自宅に設置予定の手すりや介護ベッドなどの介護費用にも一部税金が使われる事が分かった。医師の診断書を提出し面談を行う事によって、要介護五という認定を受けた祖母は退院後も公的な介護サービスを安心して受けられるようになったのだ。

現在、回復期リハビリテーション病棟に入院にしている祖母だが、振り返ると、倒れた日に多くの人がその命を繋いでくれた。布団を敷いて寝るという祖母に話しかけ続けた薬剤師の父は、目の焦点が合わず、会話が成立しない程、呂律の回らなくなった祖母の姿に違和感を覚えた。その様子を見ていた母がスマホで何かを検索するなり、すぐにどこかに電話をした。初めは一一九かと思ったが、＃七一一九という救急搬送が必要か悩んだ時に相談できる公共サービスに連絡したのだ。

＃七一一九では症状を伝えるとすぐに一一九に電話が転送され、気が付くと救急車が到着していた。祖母が倒れている事に気付いてから三十分程で脳神経外科専門の病院に救急搬送が出来たのは、連携の取れた救急医療システムの素早い対応のおかげだったと思う。これら公共サービスも税金によって運営され国や都道府県、市町村により維持されている。

社会は多くの税金のもとで成り立っている。私達が税金を納めなくなってしまったら、この国はどんな状態になってしまうのだろう。今回、税金について考えた事で、私達が大人になった時に課せられる「納税の義務」についても、大きな責任感を持って考えていかなければならないと改めて実感する事ができた。

義務というと私達は「面倒だな」「嫌だな」と思ってしまいがちだが、誰もがお互いの為に優しい気持ちで納税出来れば、もっともっと素敵な社会になるのではないだろうか。

私には夢がある。人の役に立てる人になりたい。祖母のために使われた多くの税金を思うと感謝の気持ちと新たな決意が沸いてきた。

「ありがとう」

そしていつか、私も多くの人を助け、支えられるような人になれるよう歩んでいきたい。